

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

「プロテウス型」と「抑制型」：
深層における日米文化比較についての一考察

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1989-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/702

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「プロテウス型」と「抑制型」

——深層における日米文化比較についての一考察——

崎 谷 若 菜

はじめに

1974年、1カ月ほどボストンにいたとき、隣人のポルトガル系アメリカ人の女性と知り合った。彼女は68歳で、その母は93歳であった。「私が5歳のとき」と彼女は移民の事情を語ってくれた。「30歳の母と一緒に、ポルトガルからアメリカへ渡ってきました。当時のポルトガルは共和国になったばかりで政情不安が続き、それが移民の動機だったようです。私たちはここニュー・イングランドの風土になじみ、間もなく英語をマスターしました。母はもちろんポルトガル語も話せるのですが、私は母とはもっぱら英語で会話してきました。ところが母は高齢になるにつれて英語を忘れ、ポルトガル語しかしゃべれなくなりました。母はやはりポルトガル人なんですね。私は英語しか話せないの、今では母と会話ができなくなったのです。」

人間は老いれば次第に記憶を失う。これを老人ボケというのは簡単だが、視点を変えれば、幼いとき身につけた母国語は最後まで忘れないということである。幼いときの経験は心の深層に根をおろし、容易には消えない。同じことは文化についてもいえるだろうというのが、この小論を書く動機となった。

文化とは何か

議論を進めるために、文化 (culture) とは何かを明確にしておく必要がある。

まず頭に浮かぶのは、文化人といったときの文化の意味である。この場合、文化とは高い教育を受けている、教養がある、古典を読む、高尚な芸術を鑑賞するといったイメージである。しかしこれは狭い意味での文化である。

次に文化は文明 (civilization) と対比される。フランス人は自分たちが創造した哲学、文学、芸術、科学だけでなく、ベルサイユ宮殿からパリの下水道まで、一切を含め、誇りをこめてフランス文明と呼んでいる。これに対し近代化に遅れをとったドイツ人は、文明は物質的なものにすぎず、ゲルマン民族は精神的にすぐれているとし、精神面を強調してこれを Kultur (文化) と呼んだ。文明は物質的、文化は精神的というときの文化も狭い意味である。

文化の最も広い意味で、最も適切な定義は、「人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称」(広辞苑) である。ここでいう生活の仕方とは、日常の衣食住の仕方だけでなく、技

術、学問、芸術、道徳、宗教など物心両面にわたる人間活動のすべてを含んでいる。

文化という概念では学習という言葉が大切である。インドでかつてオオカミに育てられた幼児が発見され、世界中をびっくりさせた。赤ちゃんのときからオオカミに育てられたこの幼児は、人間の生活ではなく、オオカミの生活を学習した。そのためにこの幼児は人間のように立って歩くことができず、四本の足で走り、喉を天に向けて吠えていたと報道された。Jack Londonの小説“The Call of the Wild”（荒野の叫び）は、訓練されたイヌがゴールドラッシュにわくアラスカに置き去りにされ、次第に野生化していく様子を描いている。ともに環境からの学習の重要性を教えている。「這えば立て立てば歩めの親心」というが、これは親の期待であって、赤ちゃんにしてみれば、環境、とくに両親の行動を見て、人間の生活の仕方を学習しているのである。文化とは、このようにして学習によって獲得したものの総称なのである。

文化と言語

冒頭の例のように、ポルトガル人とその背景にあるポルトガル文化にとってポルトガル語が重要であるように、言語は文化の重要な要素である。英語のような国際語は英米だけでなく、インドやフィリピンなどでも公用語にされているが、これらの国々では英語をそれぞれの文化になじませている。

イギリスの高名な歴史学者ジェフリ・バラクラフ（Geoffrey Barraclough）は次のような例をあげている。「1825年、チェコ語を話せる人はわずか15～20人しかいなかったが、この人たちがパブに集って、チェコ語を復活させようと話し合った。そして今日では全国的にチェコ語が話されるようになった。同じようにアイルランドでも伝統的な言語が復活した。」（『朝日ジャーナル』1980年12月5日号）

ポーランドは18世紀の終わりごろ国が滅びた。ポーランドを併合したプロシア、オーストリア、ロシアは、ポーランド人にポーランド語の使用を禁止し、それぞれ自国語を強制した。しかしポーランド人は、人目につかない家庭でポーランド語をしゃべり、母国語を保存してきた。ポーランド人は第1次大戦後に国が再建されるまで約120年間も母国をもたなかったが、国家が復活できたのは、ポーランド語とその背後にあるポーランド文化が生き残っていたのが主な要因であった。

言語に対する感覚は、西欧と日本とではかなりの違いがある。新約聖書は「初めに言（ことば）があった。言は神と共にあった。言は神であった。」（ヨハネによる福音書）と述べている。ユダヤ教やキリスト教では、神は天地を創造した唯一、絶対の存在である。西欧では言に文化創造の力といったイメージをもたせている。

これに対し日本では、神道によると、山や川がそこにあるように、自然がそこにあって神々がそこに住んでいるとされている。この神々は先祖の霊といった意味である。日本では言霊（ことたま）といって、言葉には不思議な霊が宿っているとされるが、これは天地を創造した神というイメージではない。

日本では、自然がそこにあることを「国破れて山河あり」という諺で表現している。しかし西欧では「国破れて言語あり」であろう。言語が生き残っていれば、文化を再活性化し、国家を再建できるというわけである。

文明は弱く文化は強し

外国を旅行すると、言葉の違いだけでなく、雰囲気の違いも感じ、カルチャー・ショックを受ける。これは文化の違いによるもので、世界中のどの文化もみな同じというわけではない。そして、地球が狭くなったといわれる現在、さまざまな異文化が接触し、衝突したり融合したりしている。

ある文化は異文化の影響を受けて絶えず変化する。これを文化変容 (acculturation) というが、多くの場合、それは表面的であって、心の深層までは根をおろしてはいない。例えば、日本は明治維新のとき西欧文明の強い影響を受けたが、それは表面的であった。断髪、洋装したが、日本人は魂までは奪われていないといって、和魂洋才と称した。

明治維新以前は、日本は中国の先進文明に心酔し、儒教などいろいろな文物を輸入したが、その影響は限られていた。儒教にはもともと男尊女卑という考えはなかったが、徳川幕府は儒教を封建制度の精神的基礎にしようとして、儒教をねじまげ男尊女卑を強調した。しかしその影響はおおむね武家社会にとどまり、遠く離れた田舎では女性は強く、のびのびと生きていた。

東京大学名誉教授の中根千枝は、儒教の影響の限界について次のように説明している。「戦後急激に女性が強くなったとか、父権喪失などといわれるが、筆者の考案からすると、この事実は日本社会における中国輸入の倫理思想の浸透・定着度の限界と、土着思想の根強さを示すものの好例であると思う。実は日本社会の男女のありかたが変ったのではなく、中国輸入のエリート文化の後退であり、基層文化のルネッサンスであると思われるのである。」(中根千枝「東洋における基層文化の性格」講座東洋思想9 東大出版会)

民族とか部族がながい歴史のなかで育んできた土着の文化を固有の文化 (indigenous culture) という。これはいわば文化の深層部分であって、容易には変らない。「私はいつもいうのだが」とジェフリ・バラクラフは語る。「文化は深い根をもっているが、文明は弱い根しかもっていない。もし文化と文明がたたかえば、文化が勝つであろう。ここで文化といているのは固有の文化をさしている。」(前掲『朝日ジャーナル』)

アメリカはしばしば「人種のるつぼ」といわれる。これはいろいろな金属が一つに融けあって合金をつくるといったイメージである。しかし実態は違う。アメリカに移民してきた各民族は、それぞれの出身地の固有の文化をひきずっている。スペイン系はアメリカでもスペイン語で学校教育やテレビ放送をしてほしいと要求している。黒人やアメリカ先住民 (アメリカ・インディアンという言葉は軽蔑のニュアンスがあるので、正しくは先住民という) が、それぞれ白人とは違う文化をもっていることは、だれの目にも明らかなことであろう。アメリカに住む各民族はそれぞれ自己の文化を確認し、主張している。アメリカの文化は大統領と星条旗を統

合の象徴として大きく一つにまとまろうとしているが、そのなかに、多くの異なった下層文化 (sub-culture) を含んでいるのである。

このような情勢は世界中で見られる。例えばイギリスでは、ウェールズ人とスコットランド人はイングランド人と異なった文化をもち、自己の文化を主張しているし、カトリック系のアイルランド人はプロテスタント系のイングランド人に抑圧されているとして中央政府に反抗し、伝統的な生活を守っている。フランスでもブリタニー人、アルサス人、コルシカ人が自己の文化を再確認しようとして、パリの中央政府に反抗している。もっとひろく世界を見ると、イスラームの世界は西欧文明とは違った道を進もうとして、独自の文化を自己主張している。われわれから見ると、イスラームの宗教は時代錯誤とも思えるほどだが、これはイスラームの文化がいかにならぬ文化と異なっているかを示している。共産主義のもとではどの民族も解放されるので民族問題は存在しないとされていたが、ペレストロイカ (改革) 路線をすすめているゴルバチョフ書記長のソビエトで、今や民族問題が目立ってきているのである。

このことは世界には多くの異なった文化があつて、いかにそれぞれが自己主張を強めているかを教えている。ところが、現在の世界は文明的にはますます一様化されてきている。科学技術と産業の発達で、自動車、テレビ受像機、衣料品、食料品など画一的な量産品が世界中に普及しつつある。われわれの物質的な生活は世界中でますます似てきている。文明の影響を受けない秘境はなくなりつつある。こうしたことを象徴的にいえば、文明は一様化しているが、(狭い意味での) 文化は多様化しているのである。

異文化間の不可共約性

スペインのカタルーニャ地方といえば、ガウディやダリなど異彩の芸術家を生んだところで、今でも芸術の世界で最先端をいっている。それだけにカタルーニャ人は自己の文化を強く主張して、中央政府からの分離を要求し、現在では自治政府をもっている。『朝日新聞』(1989年7月4日付け)によると、この自治政府は1989年春、カタルーニャ地中海研究所を設立した。これにともなつてカタルーニャ国際賞をつくり、その第1回の受賞者に、オーストリア生れのイギリスの哲学者、カール・R・ポパー (Karl R. Popper) を選んだ。

ポパーは、歴史の進みかたはある一定の法則に支配されているという歴史主義を批判したことと有名である。もし歴史がある法則に支配されていれば、そこには人間の自由も文化の自発的な発展もない。地中海研究所のジョルディ・ブジョル所長 (カタルーニャ自治政府首席) は、「ポパー氏の非決定論は自由の保証であり、人間が自己を実現するための基礎である。ポパー氏はわれわれに閉じた社会とたたかうことを教えている。」と語っている。

ポパーは、ある文化にはそれに特有の枠組み (framework) があると考えている。別の文化には別の枠組みがあることになる。これを交通ルールにたとえることができよう。ある社会の交通は一定のルールに従っているので、大局的に見れば混乱がおこらない。別の社会には別の交通ルールがある。これは比喩にすぎないが、ある文化に属する人たちは、その文化に特有の

規範 (norm) を共有して行動するので、社会生活がスムーズに営まれる。もし異なる文化圏にこの規範をもちこんで行動すれば、その生活はなんとなくこちないものになるであろう。文化が違えば、規範も違うからである。規範とは、「こうすべきである」と自己の価値観に従って行動する基準である。このため、ある文化はそれに特有の価値体系をつくりだしている。異文化どうしが接触したとき、激しい反発がおこることがあるのは、それぞれの価値観が違うからである。

700年ほどまえ、マルコ・ポーロがベニスから中国へ旅行し、元の世祖フビライにあうまでに3年もかかった。そのころ西欧と東洋はほとんど接触するチャンスがなかった。ヨーロッパ大陸の片田舎にすぎなかった西欧が世界に躍進するようになったのは、15世紀末のコロンブスやバスコ・ダ・ガマの探検に始まる大航海時代以後のことであった。ところが現在では、欧米の主要都市へほぼ半日でいける。それだけに異文化どうしが知りあう機会がふえ、異文化間のコミュニケーションがますます重要になってくる。

ではこのようなコミュニケーションは可能であろうか。「ノー」というのが、アメリカの科学史家トーマス・クーン (Thomas Kuhn) である。国際電話で海外とただちに通話ができるように、コミュニケーションが地球規模で盛んになっているのは事実だが、このようなコミュニケーションは本物であろうか。例えば、「あすの正午に会う」と約束しても、相手がアメリカ人なら時計の正午だが、アラブ人の場合は約束とかなり違う時間に会いにきても、「それは神の思し召し」によるという。意思が通じたと思っても、誤解されているかもしれない。異文化とのコミュニケーションの厳密さを追求していくと、意思の疎通はだんだんあやしくなってくる。そして究極的には不可能になってしまう。クーンはこのことを異文化間の不可共約性 (incommensurability) と名付けた。Aという文化は特定の価値尺度で割り切れるが、Bという異文化をこの価値尺度では割り切れず、端数がでるというのが不可共約性である。異国へいくと自分の価値尺度で割り切れないから、カルチャー・ショックを受けるのである。

翻訳は可能か

異文化間の不可共約性を端的に示すのが翻訳である。もちろん世界中で数多くの翻訳が行なわれている。しかし厳密なことをいうと、翻訳は不可能である。そのおもな理由は、文化の違い、すなわち言語構造の違いによる。

日本語の「ひと」に相当する英語は、不思議なことに存在しない。西欧人は、日本人とは違ってとことんまで分析して考えるから、「ひと」を分析していくと、1人の男か1人の女しかいない。だから英語では“man”か“woman”となる。人間というときにはやむをえず男 (man) で代表する。しかし日本語の「ひと」は、男でも女でもよいし、単数でも複数でもよい。このような意味の「ひと」を英語で表現することは不可能である。また human というのも男のイメージであり、person は個性をもった人間、individual は、これ以上分割できないという意味で、個人のことである。people は人民とか民族といった内容である。日本語の「ひと」を英語に翻

訳することは、どうしても不可能である。

日本語は、西欧より自由な言語構造をもっている。例えば、俳句はこの自由な言語構造の産物である。芭蕉の句に「枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮」というのがある。日本人、少なくとも俳句に興味のある日本人なら、この句の背後にある禅の境地を理解できるであろう。しかしこの句を英語に翻訳しようとするとき、まず問題になるのが、鳥は単数か複数かということである。それを決めないと翻訳はできない。単数なら、近寄って一羽であることを確認したことになる。複数なら、遠景かもしれない。また仮に翻訳したところで、西欧人はこの詩には何のメッセージもないと考えるであろう。

ユダヤ教やキリスト教でいういわゆる西欧の神（英語で God）を日本語で「神」と翻訳しても、正確な意味は伝わらない。日本の古来の宗教は多神教であって、神々は自然とともに存在している。西欧の神は自然を創造した全能の存在であって、日本人はこのような神の概念をもっていないからである。ニューヨークにある“The Statue of Liberty”を「自由の女神」と翻訳しているが、西欧人の目から見ると、あれは単なる像にすぎない。

もちろん自然科学の事実を正確に翻訳することはできる。それは価値観を含まないからである。しかし翻訳は価値観の違いを克服することはできない。ゲーテの「ファウスト」やシェークスピアの数々の演劇、ダンテの「神曲」といった、民族精神の結晶ともいえる作品をできるだけ正確に翻訳することは、異文化を理解するうえで大切なことだが、厳密な意味ではそれは不可能である。これが不可共約性なのである。

「プロテウス型」と「抑制型」の文化

アメリカの精神医学者で、イエール大学教授のロバート J. リフトン (Robert J. Lifton) は、日本人の深層心理を研究して、日本人に典型的に見られる文化の型を「プロテウス型 (Protean style)」と名付けた。これは、ギリシャ神話の海神プロテウスのように変幻自在な文化の型という意味である。

ユダヤ人がキリスト教に改宗するには一大決心が必要である。それは信仰の根幹にかかわることだからである。「あのユダヤ人もついにかたくなな律法から解放され、神の祝福を受けるようになったか」と、今でも近隣のクリスチャンから歓迎されたりする。キリスト教徒が仏教徒に改宗したりすると、欧米では無法者に見られたりする。

リフトンは、日本人は欧米人ほど改宗に苦悩しないようだと、次のような例を語っている。「私がインタビューしたある日本人学生は1年間アメリカで暮しているうちに、プロテスタントの牧師と親しくなりキリスト教に改宗したが、その人の感情と人間の根本を変えるまでには至らなかった。かれは帰国したあとキリスト教から離れ、別のことに専念するようになった。」(『朝日ジャーナル』1980年5月2日号)

日本ではほとんどの場合、女性は結婚すると、何の疑いもなく夫の家の仏教の宗派に従う。これは仏教が法事などを除いて、日本人の日常生活に深く浸透していないからであろう。しか

し宗教とは本来は個人の信念にかかわるものであり、個人の内面に深く根をおろしているはずのものであるから、この日本の習慣はおかしなことである。

「プロテウス型」の特徴は、人間や思想、行動などについて、とめどのない実験と探究を行い、そのどれをも、さらに別の心理的探索のため、いとも簡単に捨てさることである。精神分析家で京都大学教授の河合隼雄は、日本文化を「永遠の少年型」と呼んでいる。日本人は外国で生れた思想や芸術をすぐ輸入し、熱中し、流行させるが、この上昇気流はいつのまにか下降し、やがてまた新しい流行が上昇してくる。こうした輸入文化は日本の太母の子宮をくぐり抜けるとき日本化される。(河合隼雄『母性社会日本の病理』 中公叢書) このことを心理的に見ると、日本人はつねに外部のものに自己を投影してきたので、被害者意識に苦しんできたことになる。しかし最近のように日本が経済大国になり、海外から日本のリーダーシップを求められるようになると、日本人は戸惑いを感じているのである。

「プロテウス型」と正反対の立場が「抑制型 (constricted style)」である。この型は自分自身を孤立化させ、ただひとつの絶対的な原理とか集団に従って自己を形成しようとするのが特徴である。この型の文化はほかの文化から学ぼうとせず、孤立してそのアイデンティティを確立しようとするが、外に向かつては自己の文化を押し付けようとする。

「抑制型」の典型的な例は現在のイランに見られよう。1979年のイラン革命でパーレビ国王が追放され、神秘的な雰囲気を持たせただよわせたホメイニ師 (1989年6月死去) が亡命先のパリからイランに帰ってきた。イスラームの世界では、なにか困難に直面したとき、それはイスラーム教の根本を忘れたからだとして、原理主義が復活する。ホメイニ師も強烈なイスラーム原理主義を国民に呼びかけた。

イスラーム教は大きく分けて、アラブ世界に浸透している正統派のスニー派と、イランを中心とする異端派のシーア派がある。スニー派は聖と俗を区別しないのが特徴で、俗なるこの世がすなわち聖なる「神の国」であると考え。これに対してシーア派は、聖と俗を分け、俗を超えて聖なる世界の神秘性を追求しようとする。これは神秘的思考を好むイラン人の性格に合った宗教である。パーレビ国王はイランの俗なる世界を支配し、西欧の思想を取り入れて近代化をはかろうとしたが、これがイラン人の反感をかった。聖なる世界をきわめたホメイニ師が戻ってきて、イスラーム教シーア派の教義を厳格に守るよう国民に求め、西欧世界だけでなく、スニー派のアラブ世界からも孤立して、イラン文化を自己確認しようとしている。「悪魔の詩」がイスラーム教を冒瀆したとして、ホメイニ師はその著者ラシディに死刑を宣告し、暗殺に失敗して殺された者は殉教者扱いにすると宣言して、西欧世界からの強い反発をかい、自ら孤立した。

イランは革命によってパーレビ体制からホメイニ体制へ激変したが、これは原理に戻ろうとする復古運動である。日本も戦時中の偏狭なナショナリズムから戦後の民主主義へ激変したが、これは新しい実験と探求の始まりであった。

「プロテウス型」と「抑制型」は、必ずしもどちらかに固定したものではない。しかし日本で

は前者が典型的に見られ、イランでは後者が典型的に見られる。そしてアメリカの文化では「抑制型」がかなり強いのである。

清教徒と選民意識

アメリカの精神は清教徒によって培われ、アメリカの哲学は成功、つまりアメリカン・ドリームという観念に基礎を置いているといわれる。しかしこの両者は心の深層に同じ根をもっているわけではない。ここにアメリカ文化の問題点がある。

清教徒が初めて新世界に定着したのは、1620年にメイフラワー号に乗ってやってきた巡礼始祖 (Pilgrim Fathers) であった。その10年後、1000人もの清教徒がボストンにきて、この地がニュー・イングランドの中心として発達した。

清教徒は宗教改革者ジャン・カルビン (Jean Calvin) の帰依者であった。カルビンは神の絶対主権を信じ、神はその予定表に従ってあらゆる出来事をおこしているという予定説を唱えた。この予定説の重要な点は、神はある人間を選んで恩寵を予定し、他のものには永劫の罰を与え、しかもこれは人間がこの世で善行を積んだか、悪事を犯したかの結果ではなく、生れるまえから神によって定められているということである。これは基本的な人間不平等論である。

エーリヒ・フロム (Erich Fromm) は“Escape from Freedom (自由からの逃走)”のなかで、この不平等論は人間のあいだの連帯を否定するものだが、カルビン主義者は素朴にも自分たちは選ばれたものであると考えていたことを指摘している。

メイフラワー号が到着したとき、大陸は人間を寄せつけないほどの森林におおわれていたが、清教徒はそこに空地を発見して占拠した。この空地は、その3年まえ探険にきたイギリス人からうつされたペストでほぼ全滅したアメリカ先住民の生活跡であった。「神はすばらしいペストをさしつかわし行く手を清め給うた」と清教徒は神に感謝し、自分たちは選民であるとの確信を深め、先住民を悪魔の手先と考えた。

最近、アメリカのテレビ番組「青い目、茶色の目」が日本でも放映された。これはアメリカの小学校教師が行った実験教育である。先生は自分のクラスを青い目の子供たちと茶色の目の子供たちに分け、「青い目の子は選ばれた優秀な子で、茶色の目の子は劣っている。青い目の子は前の扉から出入りしていいし、茶色の目の子とは遊ばなくてもいい」といって、茶色の目の子供たちに目印の襟をつける。すると青い目の子は得意になり、茶色の目の子はいじめられるが、反抗する気力もなくなる。試験をすると、青い目の子は普段より高い点を取り、茶色の目の子は日頃ほどの成績がとれない。翌日、「きのうは違っていました。本当は茶色の目の子のほうが優秀だったのです」と先生が言って、逆の実験をする。すると子供たちのあいだの関係が逆転し、試験の結果も逆になる。3日目には先生が全員に「この2日間は実験であって、目の色と優秀さは関係がありません。差別することはよいことですか」というと、差別を体験した子供たちはいっせいに「ノー」「ノー」と呼ぶ。

この例のように、自分は選ばれた者であるといった優越意識をもつと、人間はけんめいに努

力する。アメリカに渡った清教徒は選民であるとの確信をもち、アメリカの精神を育てるほどの創造的なエネルギーをだした。

しかし、フロムは前掲書で次のような分析をしている。カルビンの帰依者は中世社会が崩壊するなかでたえがたい不安と無力、人生の無意味を感じていた。このような無力感から逃れるただひとつの道は、なにかをしようとする情熱的で衝動的な行動であり、強迫観念からくる行動であった。それは内面的な強さや自信から生れたものではなかった。

このように見てくると、清教徒の活動は内面の満足からくるものではなかった。ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) は“*The Scarlet Letter*” (緋文字)で罪の意識を追求している。不義の子を生んだヘスタ・プリンは姦通を意味するAという緋文字を胸にぬいつけ、さらしものになって、社会から糾弾される。不義の相手は若いがその徳を慕われた牧師ディムズディルで、彼は最後に公衆の面前で罪を告白し、その場にたおれて死ぬ。冷酷に復讐をはかったヘスタ・プリンの夫のチリングワスは、牧師の告白で、この邪悪な方針が支えをうしなっていて、地獄へいくほかなかった。これが大筋である。この小説の舞台になった初期のボストンは、冷たくきびしい清教徒の社会で、そこでは人間のあたたかい愛情は育たなかった。

清教徒が入植したばかりのニュー・イングランドでは、一つの教会を中心にタウンをつくり、その教会の信徒が集まって、神の選民の砦とした。この教会員が公民であり、自由な公民が集まって地方自治の組織、タウン・ミーティングを結成した。マサチューセッツ湾植民地の首都ボストンには、各タウンの代表者が集まって総会議 (General Court, 現在の州議会) がつくられた。このように見てくると、この政治組織はあたかも現在の民主主義のアメリカ合衆国の原型のように見えるが、その実態はそれとはまったく違っていた。

ボストンやセイラムなどでは、宗教が世俗の世界にまではいりこむ神政政治が行われた。教会の指導者がこの世に神の国を建設しようとして、公民に教会への出席を強制し、その日常生活にまで干渉した。異端者を公衆の目前で処刑したり、追放した。異端者は神にそむく、許しがたい人間と考えられていた。

1638年、ボストンの総会議はある決議を行ったが、そのなかに次のような表現があった。「いかなる場合でも、不必要に発砲してはならない。どのような動物に対しても同じ。ただし、インディアンとオオカミに対しては、この限りではない。」清教徒がアメリカ先住民と連帯感をもたなかったのはもちろん、自分たちのあいだでも真の連帯はなかった。カトリックのような普遍的な教会組織をもたなかった清教徒は、聖書を唯一の拠り所として神を信仰していたので、その信仰は個人によって異なる可能性があった。つまり異端者が次々に現れる可能性があった。清教徒は異端者とは連帯ができなかった。その背景には人間に対する不平等論があった。

独立宣言と人間平等論

「すべての人は平等につくられ、創造主によって一定の奪うことのできない権利を与えられ、そのなかには生命、自由および幸福の追及がふくまれていることを、われわれは自明の真理で

あると信ずる。」

これは1776年のアメリカ独立宣言の一節である。これはアメリカの思想をもっともよく代表する表現として、しばしば引用される。ここでは人間平等論が高らかに謳われている。この思想は清教徒とは違う系譜からきている。その源流はクエーカーであった。

クエーカーは正式にはフレンド教会 (The Society of Friends) というプロテスタントの一派で、17世紀のなかごろイギリスで興った。クエーカーは、「各人の良心にささやく神の声」(the divine spark in everyman) を重視した。クエーカー教徒は祈りのとき、この神の声をきき、宗教的感激のあまり身体が震えたので、震える人 (quaker) と呼ばれた。人間の純真な宗教心に訴えるクエーカーは、宗教を個人の問題と考え、他の違う宗教にも寛容であると教え、絶対的に戦争に反対した。クエーカー教徒はイギリス本国でも、マサチューセッツ湾植民地でも、清教徒から異教徒として迫害され、ときには処刑された。

ペンシルベニア植民地は、イギリスのクエーカー教徒ウィリアム・ペンが「神聖な実験 (Holly Experiment)」としてつくったクエーカー教徒のための植民地であった。この地に集ったクエーカー教徒は、アメリカ先住民とも連帯感を深め、ペンが情熱を注いで建設した都市フィラデルフィア (ギリシャ語で兄弟愛という意味) には、かつてのボストンのような暗いイメージはなく、明るく、自由な雰囲気があった。

ペンはまたイギリスの哲学者ジョン・ロック (John Locke) の影響を強く受けていた。ロックも宗教的寛容を唱えたが、「国家権力の基礎は人民の同意にあり、どんな政府も個人の生命、自由、財産を侵してはならない。これを侵したときは、人民は新たな政府を樹立すべきである」という政治思想をもっていた。この思想はアメリカ独立に決定的な影響を与えた。独立戦争はボストンで始まったが、独立宣言が読まれ、自由の鐘が打ちならされたのがフィラデルフィアであったのは、象徴的なことであった。

1776年の独立宣言は単にイギリスの植民地からの独立を意味しているだけでなく、世界で初めての共和国であるアメリカ合衆国の成立であった。アメリカ人は誇りをこめてこれをアメリカ革命と呼び、その人権思想は13年後のフランス革命 (この革命については最近、その暗黒面を掘り起こして革命自体を再評価すべきだとの意見も高まっている) に大きな影響をあたえた。19世紀後半になると民主主義とともにアメリカ文明を世界にひろめるのは明白な使命 (Manifest Destiny) であるとの信念が、アメリカ人のあいだに強まった。これは西部開拓の原動力になった。さらに2つの大戦で、アメリカの民主主義は勝利をおさめた。第2次大戦後は、アメリカの民主主義のイデオロギーとソビエトの共産主義のイデオロギーが正面から対立し、いわゆる冷戦となった。1980年代になって、ソビエトや東欧諸国、中国で貧富の差が激しくなったり、生活が苦しくなったりして経済問題が表面化し、民族問題もきびしくなって、共産主義のイデオロギーの正当性が問われている。その結果、自由主義の哲学と個人主義の哲学にもとづくアメリカの民主主義は勝ち誇っているようである。1959年、ソビエトのフルシチョフ首相はアメリカを訪問して、誇らしく共産主義の優秀性を強調した。しかし、最近の米ソ首脳会談で

は、ソビエトのゴルバチョフ書記長は共産主義体制の改革の必要性を説き、アメリカのレーガン、ブッシュ両大統領は民主主義の勝利を宣伝している。

しかしそこには問題も多い。そこで次に、日米を文化の面から比較して、問題点を指摘し、結論としたい。

む す び

(1) アメリカの創造的エネルギーの第一の源は、清教徒の思想であった。情熱的、衝動的に働く清教徒は世俗的禁欲という職業論理をもっていた。これはまさに勤儉節約の精神であり、この精神をもって世俗的、道徳的に成功することはまた選民の証拠とされた。このようにして清教徒の思想は、アメリカの資本主義を発達させずにはおかなかった。典型的なヤンキーのベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) は「怠惰は病気をひきおこし、命をも縮めませ。使っている鍵はいつも光っているが、怠惰は錆のようなもので、労働で消耗するよりも早く肉体を蝕むものです。」(貧しきリチャードの暦) と語っている。

この清教徒がつくった文化は「抑制型」の文化であった。ニュー・イングランドの初期の入植者、巡礼始祖をはじめとする清教徒は分離派 (Separatist) であった。分離派は英国国教会に対する徹底的な改革を主張し、信仰の自由と信徒の教会の独立性を強調した。つまり彼らは、自分たちの「真の教会」の分立を求めていたのである。これは自分自身を英国国教会から徹底的に孤立させ、ただひとつの原理に従って自己を形成したことを意味していた。このため清教徒の集団は、異端者を迫害し、追放したのである。しかしフロムも指摘するように、心理的に見ると、清教徒は「不安からの死にもものぐるいの逃避」を試みていた。清教徒の行動は積極的な心理ではなく、消極的な心理にもとづいていた。その文化は心の深層にそれほど深い根をもっていない。それだけに、この「抑制型」の文化は変化する余地を残していたのである。

アメリカの資本主義は清教徒の思想の結果として発達した。世俗的、道徳的に成功した人たちは不安から解放された。その結果、「成功」がアメリカの哲学の基礎になった。今日ではアメリカ人はできるだけ働かずに、日本人から大きく借金して、いかにして豊かな生活ができるかと腐心しているようである。それなのに、日本人は働きすぎだとか、日本の文化は間違っている、などと日本を非難している。

心の深層への根のおろし方で、清教徒の文化は、イランの文化とは違う。イスラーム教シーア派の教義は、神秘的な思想を好むイラン人の心に深く根をおろしている。この復古的な宗教が、イラン革命で劇的に復活した。西欧化を進めたパーレビ国王時代でも失われていなかった。ここに固有の文化の根の深さを見ることができる。しかしアメリカでは、このような激しい復古はあり得ないであろう。

(2) アメリカの独立宣言は相対主義を明確にした。人間の自由、平等とは、ただひとつの原理をすべてに押しつけることではない。相手の信念を尊重しなければならない。これは民主主

義政治体制の基礎となったが、多民族国家であるアメリカにとってはきわめて重要な意味をもってくる。アメリカの創造的エネルギーのもうひとつの源は、この多民族国家がもつ多くの異文化どうしの接触であろう。多くの優秀な頭脳が自由な体制にひかれてアメリカに流入しているのを見ても、それは明らかであろう。

しかし、「抑制型」の文化どうしが接触すると衝突は避けられない。アメリカの民主主義の体制とソビエトの共産主義の体制の対立が、その典型的な例である。このような衝突が続くと、一方の体制が他方を支配するか、あるいは世界を破壊するかのどちらかである。仮に一方が他方を支配したとしても、その文化までは支配できない。文化、特に固有の文化は深い根をもっているからである。米ソの対立、つまり冷戦は、米ソの破壊だけでなく、世界の破壊を避けるため終ろうとしている。

(3) 清教徒の人間平等論と独立宣言の平等論とはどんな関係にあるのだろうか。不平等論と平等論は論理的には両立しない。しかし人間の心理のなかでは両立し得る。意識の世界での平等論、無意識の世界での不平等論である。これはアメリカの多数民族の話であり、黒人やアメリカ先住民など少数民族にとっては、平等に扱われているといった感覚はないであろう。アメリカの多数民族は国内の少数民族だけでなく、アジアやアフリカの異文化を平等に扱っていると意識しても、無意識からの不平等のシグナルを完全に否定できるであろうか。日米交渉でも、アメリカは日本を見下すような態度をとっていると思うのは、日本人の被害者意識のせいだけであろうか。

アメリカ人はもちろん、人間の平等を実現するため大変な努力をしている。公民権を要求する少数民族の声に、多数民族は真剣に耳をかたむけている。その姿は感動的でさえある。しかしアメリカ人は意識の世界では高度の文明を目指しながら、無意識の世界では粗野である、といわれる。このすきまに覚醒剤がはいりこむ余地がある。少なからぬアメリカ人が覚醒剤で幻覚の世界にひたって、超越的な経験をしようとしている。これはアメリカ人の道徳を掘り崩している。今日では麻薬問題がアメリカの大きな社会問題になっている。

カルビンの人間不平等論はナチスにいきいきと復活した、とフロムは指摘している。ユダヤ人は永劫の罰を受ける人間であるとして、ナチスはユダヤ人を抹殺しようとした。カルビンの帰依者である清教徒が築いたアメリカで、なぜナチスのような偏狭な全体主義が発生しなかったのか。それどころか、アメリカはナチスに迫害されたアインシュタインら第一級の人物の亡命をよろこんで引きうけたのである。

フロムは歴史を動かす要因のひとつとして、ある民族や人間集団の社会性格 (social character) を重視し、ナチスを支持したドイツ下層中産階級の社会性格に注目した。社会性格とはその文化、特に固有の文化の特徴である。ここに、ゲルマンの民族精神は世界に冠たるものであると思いがかったドイツの文化と、民主主義を進展させてきたアングロ・サクソンの文化との違いを見出すことができよう。アメリカ人は意識の世界では見事な人間平等論を展開している。

清教徒の不平等論は、少なくとも意識の世界からは消滅している。

(4) 「プロテウス型」の文化の特徴は、異文化と接触しても衝突があまり起らないことである。典型的な「プロテウス型」の日本文化は、異文化を吸収しながら、その都度、変化をし、育ってきた。例えば、日本は戦時中の偏狭なナショナリズムをケロリと忘れ、戦後は民主主義に熱中した。しかし外国人の目には、日本はまたなにか危険な国に変わるかもしれない、との不信感が残る。外観から見るかぎり、日本の文化のアイデンティティが明確でないからである。

しかし日本の固有の文化は深い根をもっている。だがこれも明確ではない。外から異文化がはいつてきて、日本化されたときに、具体的な形になる。そこで外国人には、日本文化がますます分かりにくくなる。

(5) 現在の世界はそれぞれの文化が自己を再確認し、自己主張をしている。たとい抑圧された少数民族の文化でも、発言を強めている。このように見てくると、「抑制型」の文化は、異文化間の不可共約性をはっきり認識することが大切である。これは異文化とのコミュニケーションは不可能だという意味ではなく、異文化は容易には理解できないほど自分の文化とは異なるということ認識することである。そうすれば、相手の文化を尊重する気持になるであろう。そのうえで、文化の違いを超えた新しい地平線をひらく態度が重要になってくる。異文化を自己の文化で塗りつぶすようなことをすると、異文化からの反発を受け、のちに民族問題に悩むことになる。

これに反して「プロテウス型」の文化は、自己の文化を相手に理解させるよう、はっきり発言することが大切である。そうしないと、外部から誤解という報復を受けることになる。

(本学講師＝英語担当)